

湘南藤沢学会「研究助成金2018」研究成果報告（研究会合宿）

青森県で『聴く』について考える夏合宿

清水唯一朗研究室（オーラルヒストリー）

慶應義塾大学 環境情報学部 4年 江口 未沙

日時：2018年9月1日～2018年9月3日

場所：青森県青森市

活動人数：19名

1. 活動目的

清水唯一朗オーラルヒストリー研究会では、所属している学生がそれぞれの研究テーマに関して、『聴く』という手法を用いて、個人研究プロジェクトを進めている。春学期は、共通の文献を読み、研究会の時間にディスカッションを行うことで、『聴く』ことに関する知見を深めてきた。また同時に、各ゼミ生がそれぞれの研究テーマを元に、研究デザインを考え、発表を行った。

上記のような春学期を経て行われた今回の夏合宿の目的は、11月に開催されるORFでの発表に向け、集中的に学生同士が議論し合い、『聴く』ことについて探求し、それぞれの研究に磨きをかけることだ。

申請書では、開催地を長野県小布施町としていたが、申請後に青森県青森市に変更した。その理由としては、研究会内に青森県出身の学生が2名おり、彼らを介することで、より深くその土地と関わるができるのではないかと考えたからだ。

『小布施町×SFCプロジェクト』のため毎月の活動が可能となった小布施町に加え、また新たな土地との関係性を築きたいと考え、開催地を変更した。

2. 活動内容

本夏合宿では、春学期から進めてきた個人研究プロジェクトの成果・進捗発表を、ゼミ生全員が行った。そこでは、ポスターセッションのような形式で、数人ずつに分かれ、発表する学生のもとをまわりながら、入れ替わりで発表を聴くようにした。発表者には1回20分の発表と15分のフィードバックの時間を設けた。このように、一度に大勢の人に向けて発表するのではなく、複数回に渡って、少数の人に向けて発表することで、意見交換の時間を増やし、発表者がより多様なフィードバックを得られるようにした。

食事の時間は、ゼミ生と教授で同じテーブルを囲み親交を深めた。そこでは、海鮮を中心にした食事と津軽三味線など、青森県の文化に触れながら、お互いの研究やプライベートの話に関して、和やかな雰囲気の中で話すことができた。さらに、青森市内のフィールドワークでは、博物館や資料館を訪れ、青森の伝統文化に触れた。そこでも、ゼミ生同士が楽しみながら過ごし、お互いの理解と信頼を深めることができた。

3. 活動日程

9/1	個人研究発表(1)@青森県男女共同参画センター ・発表者4人×35分×2ターム ・発表者2人×35分×1ターム 懇親会
-----	--

9/2	個人研究発表(2)@男女共同参画プラザ ・発表者4名×35分×2ターム ・発表者2名×35分×1ターム 懇親会
9/3	青森市内の博物館や資料館を中心とした研修

4. 活動成果

活動成果として、研究の進展、ゼミ生同士の相互理解、研究と社会のつながりとの再認識が挙げられる。

各ゼミ生は、時間的に余裕のある夏休みに研究プロジェクトを進めている。本合宿は、そんな夏休みのちょうど中間に開催された。ゼミ生18名分の個人研究発表を、3日間という短期間の中に凝縮して行い、常に相互に刺激を与え続ける環境で意見交換を続けた。それにより、夏休みの後半、さらにはORFに向けて、各々の課題を再確認し、研究の進行に弾みをつける機会となった。

また、ゼミ生間の関係性が深まったという点でも、本合宿を実施した意義は大きい。今回の合宿を通して、3日間生活を共にすることで、お互いの研究への関心が高まっただけでなく、お互いのパーソナリティに対する理解を深めることができた。個人プロジェクトであるからこそ、個人のテーマとパーソナリティは密接に結びついている。合宿という形を取ることで、研究発表外の時間にもその個人の新しい側面を知ることができたことは意義があった。

さらに、以前に栗川開（環境情報学部4年）の個人研究プロジェクトが日本テレビ・ミヤギテレビで放送されたのだが、それを見ていた宮城県出身の方に偶然出会い、栗川が応援と感謝の言葉をいただく場面に遭遇した。多くのゼミ生がフィールドに入ってプロジェクトを行っているが、自分たちの活動の社会的な意味、社会とのつながりを皆で再認識した。

5. 今後への活かし方

オーラルヒストリー研究会では、11月に開催されるORFでの発表を目標に掲げて活動している。今回の成果は、日々のプロジェクトを充実させ、ORFでの展示を向上させることで活かしていく。

まず、合宿で得たフィードバックや気づきは、夏休み後半からの活動の骨になっている。ゼミ生は残りの夏休み期間からすでにプロジェクトを進めている。成果発表のなかで、どう進めたら良いか迷っていた学生が方向性を見出したり、学生によってはプロジェクトデザインを見直したりすることもあった。いずれにしても、それらの振り返りが今後のプロジェクトを作っていく。

また、合宿で築いたゼミ生同士の互いへの理解や信頼は、深いプロジェクトへの理解に直結する。秋学期からの研究会活動のなかで、フィードバックや議論の質を向上が期待される。また、理解が進んだ関係性のなかで、ORFで「外部の人に何を伝えるべきか」「社会に対してより伝わる発表とはどういうものか」を話し合いたい。今回の成果を経て、研究会活動を続け、各プロジェクトの一層の充実を目指す。

6. 謝辞

本研究会合宿にご援助くださった湘南藤沢学会に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。